

# 寒冷地域における青少年サッカー振興に関する

## 国際比較についての基礎的研究

### —札幌地区とデンマークの比較検討—

中西健一郎\*

旦祐介\*\*山本三楽\*\*\*土屋潤二\*\*\*\*加藤勇之助\*\*\*\*\*白川敦\*\*\*\*\*長島健二郎\*\*\*\*\*

#### 抄録

本研究では、先行研究から札幌地区と比較して青少年に幅広くサッカーが普及していると推測されたデンマークの実態を調査し、日本の寒冷地における青少年サッカー振興において有用な知見を得ることを目的とした。本研究の調査結果から獲得・推察された知見は以下のとおりである。

- ①デンマークの6～12歳の少年の56%がサッカー協会に登録された選手であり、札幌地区の約20%を大きく上回る。また、デンマークサッカー協会の報告によると2009年から2011年でサッカーに取り組む6歳～12歳の少年の割合が約12%増加している。
- ②デンマークの青少年サッカー選手は、札幌地区と比較して試合や練習に対する満足感、有能感、他者受容感が高い傾向にある。
- ③デンマークの青少年サッカー選手は、札幌地区と比較して睡眠時間が長く、日常生活において時間的余裕が多いことが推察される。
- ④デンマークでは、サッカー協会が人工芝グラウンドの増加を推奨し、自治体・行政の機関がサッカーグラウンドの除雪作業を行うことで、冬季においてもできる限り屋外でのサッカー活動を可能にしている。

デンマークサッカー協会では、原則として12歳までは個々の能力に左右されず、全員平等にサッカーに取り組む環境を整え、活動内容においては、競技的側面よりも社会的側面を重視している。したがって、プロチームの下部組織であるU-12年代のチームであってもエリートチームは存在しない。この指導指針が、デンマーク国民が備えている「平等」「公平」を尊重する精神風土にとってもよく適合している点も青少年サッカー人口が大きく拡大している一つの要因である。

また、青少年サッカー関係者（コーチ、ボランティア、保護者等）の慣習やライフスタイルが、多くの選手に充実した練習、試合を提供することを可能にしていた。

札幌地区においても、「補欠ゼロ」を指導指針の一つとして、充実したサッカー環境の整備を目指しているが、主に運営スタッフの不足や冬季の活動施設確保等の問題があることが推察された。

キーワード：デンマーク、青少年サッカー振興、指導指針、ライフスタイル、平等

---

\* 東海大学札幌校舎課程資格教育センター 〒005-8061 北海道札幌市南区南沢5条1-1-1

\*\* 東海大学国際戦略本部 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

\*\*\* 札幌市立琴似小学校 〒063-0812 北海道札幌市西区琴似2条7丁目

\*\*\*\* 日本オランダ徒手療法協会 〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-48 フォーサイト南麻布4F

\*\*\*\*\* 筑波大学附属駒場中学高等学校 〒154-0001 東京都世田谷区池尻4-7-1

\*\*\*\*\* 東海大学大学院体育学研究科 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

# An international comparison of Youth soccer promotion in a cold environment

—Denmark and Sapporo—

Kenichiro Nakanishi\*

Yusuke Dan\*\*Miyoshi Yamamoto\*\*\*Junji Tsuchiya\*\*\*\*Yunosuke Kato \*\*\*\*\*

Atsushi Shirakawa\*\*\*\*\*Kenjiro Nagashima \*\*\*\*\*

## Abstract

This report looks at the state of youth soccer in Denmark with the aim of finding ways to enhance youth soccer in Sapporo. The findings of the report were as follows:

- 1) In Denmark 56% of boys from 6 to 12 years old are registered with the soccer association, as opposed to 20% in Sapporo. In addition, there was a 12% increase from 2009 to 2011.
- 2) Players in Denmark reported more satisfaction and feelings of accomplishment from practice and matches than players from Sapporo.
- 3) Players in Denmark get more sleep and enjoy more free time than players in Sapporo.
- 4) The Denmark soccer association has recommended increasing the number of artificial football pitches and local governments engage in snow removal which allows for playing outside, even in winter.

The Denmark Soccer Association has a guideline that allows all youth players to develop their abilities equally. Social virtues are emphasized over competition and as a result the U12 has no elite teams. This guideline fits the mindset of Danish people who value equality. That might be one reason why the number of youth soccer players is increasing. The lifestyles and habits of people who are involved with youth soccer (coaches, volunteers, etc.) allow for more fulfilling and meaningful practices and matches. As for Sapporo, which has a ‘no bench players’ guideline, problems related to staff and facilities are an issue.

Key Words : Denmark, Youth soccer, Guidline, Lifestyles, Equally

---

\*Liberal Arts Education Center, Sapporo Campus ,TokaiUniversity,5-1-1-1 Minamisawa,Minami-ku,  
Sapporo 005-8601 Japan

\*\*Department of International Studies, TokaiUniversity, Kitakaname Hiratsuka, Kanagawa, 259-1292 Japan

\*\*\*Kotoni Elementary School(Sapporo) 2-7,Kotoni,Nsihii-ku,Sapporo 063-0812 Japan

\*\*\*\*JADMT (Japan Association of Dutch Manual Therapy)

4F Foresight Minamiazabu, 4-5-48 Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 Japan

\*\*\*\*\* Tsukuba University Komaba Junior High School &High School, 4-7-1 Ikejiri,Setgaya-ku,

Tokyo 154-0001 Japan

\*\*\*\*\*Graduae School of Physical Education, TokaiUniversity, Kitakaname Hiratsuka, Kanagawa,

259-1292 Japan

## 1. はじめに

日本サッカー男子代表チームは、1998年フランス大会から4大会連続でワールドカップ出場を果たしている（2002年日韓ワールドカップは地元開催による出場）。大会成績も2010年南アフリカ大会では予選リーグを突破し、Best16進出を果たした。女子代表チームにおいても2010年ワールドカップ優勝、2012年ロンドンオリンピック銀メダルと世界トップレベルの実績を残していることから、近年の日本サッカーの競技力は確実に向上していると思われる。日本サッカーの競技力が向上した背景には、指導者ライセンス制度の整備、プロリーグ（Jリーグ）の設立、タレント発掘の活性化等いくつかの要因が考えられる。

本研究では、このように「強化」に関する環境の充実により国際大会での実績を重ねている日本サッカーについて、「普及・振興」という観点から考察していきたい。国際大会において定期的に上位に進出する国々では、サッカーが生涯スポーツとして定着し、競技レベルに関わらず誰でも日常的にプレーを楽しんでいることが数多くの報告により明らかにされている。その一方で、日本サッカー協会によると、我が国では登録選手数が18歳以上になると激減することが報告されている。これは、民間組織が主催する大会（サッカー協会への選手登録が不要）でプレーするサッカー愛好者も一定数はいると推察されるが、部活動に所属している競技者が大多数を占める日本では、学業期間の終了とともに競技生活を終える選手が数多くいることを示唆している。日本サッカー協会は、JFA2005年宣言を掲げ、「2015年にサッカーファミリー500万人、2050年に1000万人」という目標の実現を目指し、日本にもサッカーが文化として根付くために様々な活動に取り組んでいる。これは、日本サッカーが「サッカー強国」ではなく、恒常的に国際大会において優れた競技成績をあげ、なおかつ競技人口の更なる拡大・確保に基づいた「サッカー大国」を将来的に目指すためには、生涯スポーツとしてサッカーが定着することが不可欠であるためである。その際、欧州のサッカー環境は参考にすべき点が多いが、普及・振興を考慮する場合は、その地域の環境やライフスタイルに即した形態が必要となる。デンマークは、札幌地区と気象条件や生活環境において類似点が多く見られるが、青少年のサッカーに取り組む実情は日本ではあまり知られていない。今回は、デンマークの青少年サッカーの実態を把握し、札幌をはじめとする道内青少年サッカー活動の活性化につながる資料を作成したいと考えている。

## 2. 目的

デンマークは、札幌地区と同様に厳しい寒さや降雪など冬季には厳しい気候環境下におかれる。しかしながら、先行研究から札幌地区と比較すると青少年に幅広くサッカーが普及していると考えられる。本研究では、デンマークの青少年サッカーの実態を調査し、日本の寒冷地での普及において有用な知見を得ることを目的とする。

## 3. 方法

札幌地区（本研究では、札幌市、江別市、石狩市とする）及びデンマーク（本研究ではコペンハーゲン市、オーデンセ市とする）における少年サッカーの現状を把握するために、インタビュー調査及び質問紙調査を実施した。デンマークでのインタビュー調査においては通訳者を介してデンマーク語で実施し、質問紙は英語での回答を依頼した。両方の調査における全ての対象者に、自由意思での参加を求め、本研究以外の目的で得られた解答を利用しないこと、匿名性が厳守されることを説明し、協力の同意を得た。

### 3-1. 指導者へのインタビュー調査

#### ①調査対象

[デンマーク]

##### 1)デンマークサッカー協会（DBU）

普及プロジェクトリーダー 1名

##### 2)デンマーク・2部リーグU12チーム コーチ 2名

##### 3)デンマーク・2部リーグユース部門

ダイレクター 1名

[札幌地区]

##### 1)札幌地区のU12チーム指導者5名

#### ②調査期間

[デンマーク]

2013年9月7日～9月14日

[札幌地区]

2013年12月1日～12月8日

#### ③質問項目（デンマーク、札幌地区共通）

##### 1)選手育成指針

##### 2)活動状況

##### 3)普及活動

## 3-2. 選手へのインタビュー調査

## ①調査対象

[デンマーク]

- 1) デンマーク・2部リーグU12チームの選手5名  
(10歳2名、11歳3名)

[札幌地区]

- 1) 札幌地区のU-12年代チーム所属の選手5名  
(11歳1名、12歳4名)

## ②調査期間

[デンマーク (コペンハーゲン、オーデンセ) ]

2013年9月7日～9月14日

[札幌地区]

2013年12月1日～12月8日

## ③質問内容 (デンマーク、札幌地区共通)

- 1) 活動状況
- 2) ライフスタイル

## 3-3. 指導者への質問紙調査

## ①調査対象

[デンマーク]

- 1) デンマークサッカー協会に所属するU-12～U-10年代のチームの指導者9名に協力を依頼し、インターネット上で回答を得た。

[札幌地区]

- 1) 日本サッカー協会に所属するU-12～U-10年代のチームの指導者26名に協力を依頼し、指導者会議などで質問紙を配布し、回答を依頼した。

## ②調査期間

[デンマーク]

2013年9月1日～2014年1月25日

[札幌地区]

2013年8月1日～12月1日

## ③質問項目

- 1) 活動状況
- 2) ライフスタイル
- 3) 指導方針

## 3-4. 選手への質問紙調査

## ①調査対象

[デンマーク]

- 1) デンマークサッカー協会に所属するU-12～U-10年代のチームの選手35名に協力を依頼し、インターネット上で回答を得た。

[札幌地区]

1) 日本サッカー協会に所属するU-12～U-10年代のチームの指導者に質問紙の配布してもらい、回答を調査者に郵送するように依頼した。結果188名の回答を得ることができた。

## ②調査期間

[デンマーク]

2013年9月1日～2014年1月25日

[札幌地区]

2013年8月1日～12月1日

## ③質問項目

- 1) 活動状況
- 2) ライフスタイル
- 3) 指導方針

## 4. 結果及び考察

本研究の調査によって、デンマーク及び札幌地区における青少年サッカー振興において以下の知見が獲得・推察された。

#### ①デンマークの6～12歳の青少年の56%がサッカー協会に登録された選手であり、札幌地区の約20%を大きく上回る(資料1)。

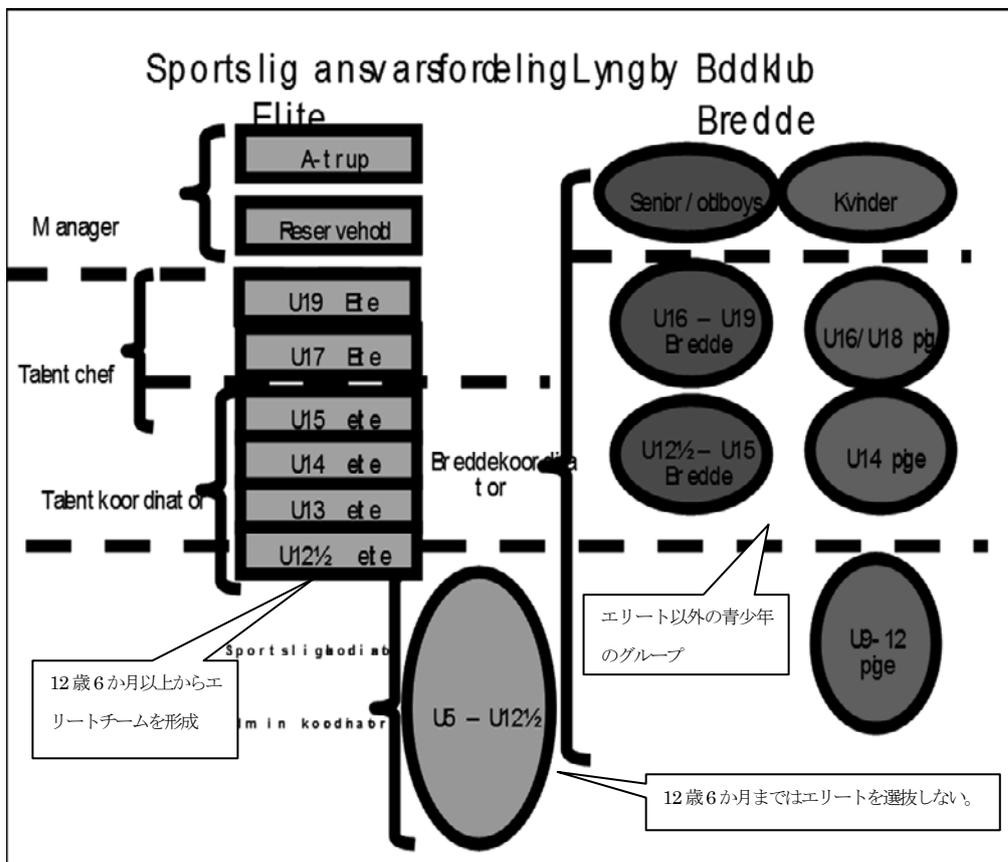
以前は、デンマークにおいても他のサッカー強豪国同様、低年齢からのタレント選抜を実施し、エリート選手の強化を実践していた。しかしながら、選抜された選手が周囲からの期待やプレッシャーやパフォーマンスの伸び悩みなどを理由にドロップアウトするケースが散見された。

デンマークは全人口約550万人という小国である。ゆえに、数少ない才能を持った選手たちのサッカーからのドロップアウトは、代表チームなどシニア年代のトップレベル強化という視点から見ても大きなマイナスである。

このような背景からデンマークサッカー協会は、育成年代の指導指針を転換し、原則として12歳までは個々の能力に左右されず、全員平等にサッカーに取り組む環境を整え、活動内容においても競技的側面よりも社会的側面(サッカーを通じての交流等)を重視するようにしている。したがって、プロチームの下部組織であるU-12年代のチームであってもエリートチームは存在しない(資料2)。また、このような指導指針が、従来デンマーク国民がもつ「平等」「公平」を尊重する精神風土にとってもよく適合している点も青少年サッカー人口が大きく拡大している一つの要因である。

Age groups	Population in DK 2009	Players 2006	Players 2009	% of pop. 2009	Players 2011	% of pop. 2011	Players 2015	% of pop. 2015
Boys 6-12	215.000	96.000	103.000	44%	121.000	56%	122.000	57%
Boys 13-19	225.000	51.000	54.000	22%	61.000	27%	68.000	30%
Boys total	440.000	147.000	157.000	33%	182.000	42%	190.000	43%
Girls 6-12	205.000	25.000	29.000	12%	37.000	17%	40.000	19%
Girls 13-19	215.000	19.000	21.000	10%	23.000	10%	35.000	16%
Girls total	420.000	44.000	50.000	11%	60.000	14%	75.000	18%
Boys & girls total	860.000	190.000	207.000	22%	242.000	28%	265.000	31%
Men 19+	1.353.000	92.000	93.000	7%	97.000	7%	100.000	8%
Women 19+	1.319.000	13.000	13.000	1%	18.000	1,4%	20.000	1,5 %
Total	5.500.000	297.000	313.000	6%	357.000	6%	385.000	7%

資料1 デンマークサッカー協会選手登録数の変遷



資料2 Lyngby Ball Club(デンマーク2部)育成組織図

## ②デンマークの青少年サッカー選手は、札幌地区と比較して、試合や練習に対する満足感、有能感、他者受容感が高い傾向にある。

質問紙調査では、デンマークの選手が札幌地区と比較して、活動に対する満足感、有能感、他者受容感が高い傾向にあることが推察された(図1～図3)。これは、①で述べたようにデンマークでは、できる限り選手全員が、平等に試合、練習に参加する機会があることとの関連性が推察される。したがって、どのレベルの選手においても試合で十分なプレー機会が確保され、自らの能力発揮を実感できている点は選手たちにとって大きな喜びであるだろう。

このような調査結果に関連して、札幌地区をはじめとする日本の青少年選手が海外との比較において、ネガティブな傾向を示すことに関しては、勝利至上主義による指導内容や強豪チームの補欠選手の多さを要因としている先行研究が見られ、これらの問題が、すべて根絶されているかは不確かである。

しかしながら、北海道サッカー協会第4種委員会は、2015年度以降の基本方針の中で、

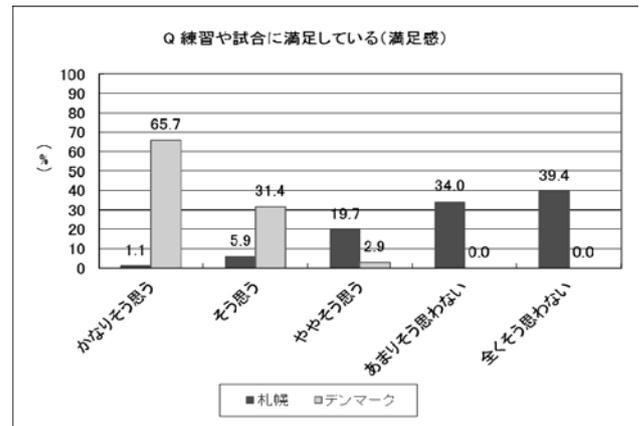
- (1) Players First の理念に基づいて、ゲーム環境の構築を図る。
- (2) 登録された全ての選手に公式戦の機会が用意されるように取り組む。(補欠ゼロの配慮がされたゲーム環境づくり)

といった点を掲げており、選手たち全員が公式戦を経験する機会を持てるよう試行している。また本研究のインタビュー調査においても、札幌地区の数多くの指導者が選手たちの環境改善に多大な労力を費やしていることが明確になった。

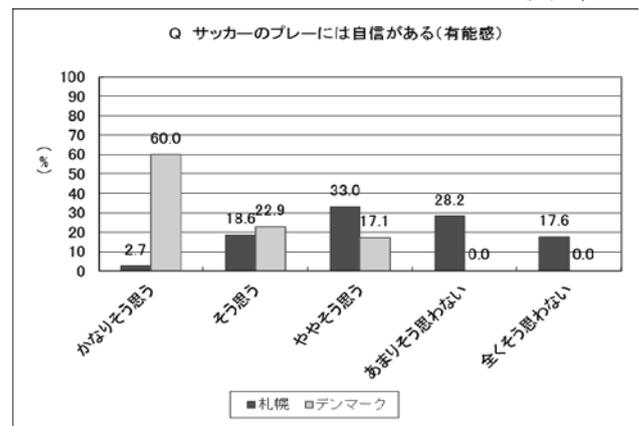
同時に、札幌地区での少年サッカーの大きな問題点の一つは、運営スタッフなどの活動を支える人手不足である。選手全員に同じように十分な試合出場時間を確保するには、現在よりも多くの試合数、試合場所、試合時間の確保が必要である。しかしながら、このような環境整備のための運営スタッフが不足しているために、現実的には困難な状況である。また、試合への出場機会や出場時間の短い選手が有能感を持っていないことは自明であり、これらは、今後の青少年サッカー振興に関して解決すべき重要な課題である。

デンマークサッカー協会が指導指針により社会的側面を重視するように促している点がデンマークの選手が他者受容感が高い傾向にある要因の一つであると推察される(資料3)。デンマークでのイ

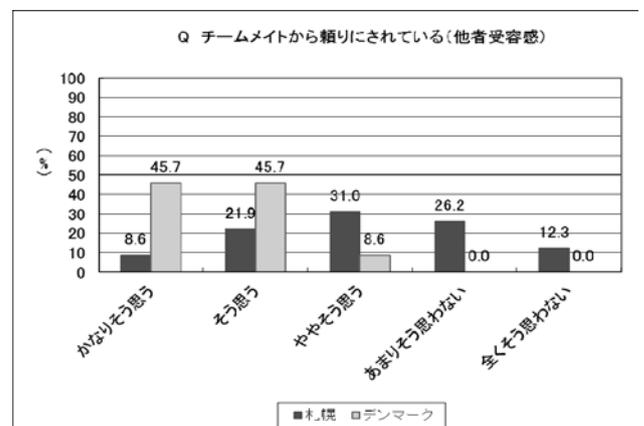
ンタビュー調査によると、各サッカークラブにおいて選手に友人や家族、クラブ関係者と交流できるような機会(キャンプや食事会など)をできるだけ多く作るように働きかけていることが明らかになった。現在の日本では子どもたちが「仲間集団」を作ることが少ないという報告がある。今後、札幌地区をはじめとする日本の青少年サッカー活動においても社会的側面を重視し、新しい試みを取り入れることが期待される。



(図1)



(図2)



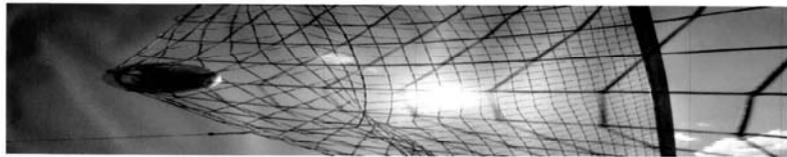
(図3)



## Recruit more, and limit the drop-out

### Different age groups requires different strategies

- Boys U12: developing individual technical skills
- Girls U12: join a football club with your best friend(s)
- Teenagers: focus on the social perspective – not the competitive...
- Men: football is other games than 11v11
- Women: social and health-perspective
- Seniors: small-sided games, social and health-perspective

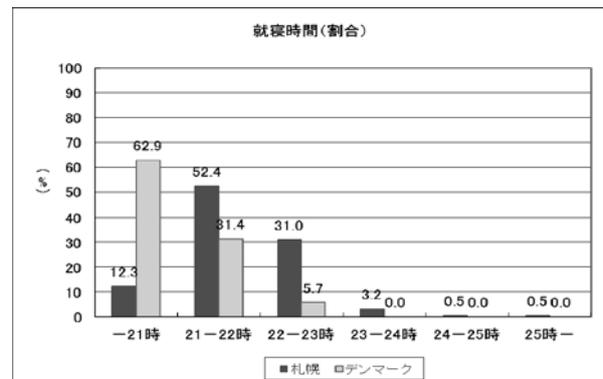


資料3 デンマークサッカー協会活動方針(一部抜粋)

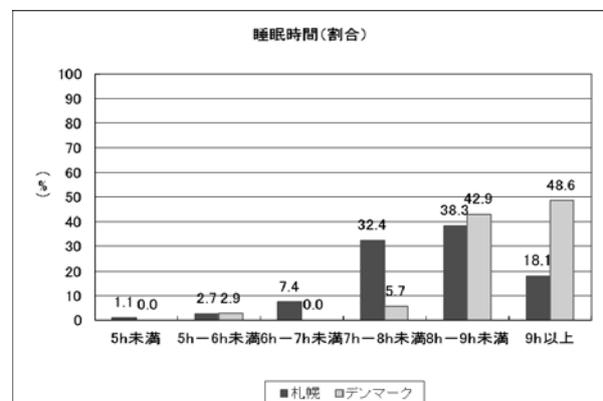
③デンマークの少年サッカー選手は、札幌地区と比較して睡眠時間が長く、日常生活において時間的余裕が多いことが推察される。

質問紙調査において、デンマーク・札幌地区の選手たちのライフスタイルにおいて、睡眠に関する相違点が推察された。睡眠時間はデンマークのほうが長く、就寝時間も早い傾向にあることが見受けられる。これらは、デンマークの子ども達の学校の終業時刻が日本よりも早いことや家庭学習の時間が短い傾向にあることも無関係ではないと考えられる。今回の調査では、習い事の週当たりの回数では顕著な違いはみられなかったが、デンマークにはいわゆる学習塾といったものに通う習慣はない。札幌地区では普段の睡眠時間が7時間未満の選手の割合が約11%（デンマークは約3%）となっていた。先行研究やインタビュー調査から、一般的にデンマークの子どもの平日のタイムスケジュールは、札幌地区や日本の子どもの平日のタイムスケジュールと比較して自由時間が多く、余裕のある中でサッカー活動に取り組んでいることは明白であった。また、②で述べた札幌地区では、少年サッカーにおいて運営スタッフの不足が大きな問題であるが、デンマークではボランティア活動に積極的な成人が多く、労働習慣の違いから平日でも14:00や15:00に仕事を終える父兄が多いため、子どもたちを支える周囲の大人は数多くいることが常態化している。このような相違点は、成人の労働の慣習、ライフスタイルの相違が青少年スポーツの

振興に大きな影響を及ぼしていることを示唆していると言えるだろう。



(図4)



(図5)

④デンマークでは、サッカー協会が人工芝グラウンドの増加を推奨し、自治体・行政機関がサッカーグラウンドの除雪作業を行うことで、冬季においてもできる限り屋外でのサッカー活動を可能にしている。

2000年代頃までは、デンマークにおいても札幌地区同様、冬季は厳しい寒さによる凍結のため屋外でサッカー活動を実施することは困難であった。しかし、近年は人工芝のサッカーグラウンドをサッカー協会が主導して積極的に増設している。人工芝のグラウンドならば、氷点下の気温においても練習や試合を行うことが可能である。また札幌地区との大きな違いとして、自治体や行政機関が、公共の運動施設（市営の屋外運動場、公園、サッカーグラウンド等）をできるだけ使用できるように除雪作業を行うとのことであった。デンマークでは、自治体や行政が、税金で建設した公共施設を常に利用できるように保つことは当然であると考えられている。もちろん札幌地区は、デンマークに比べて年間降雪量も多く、全て同様に考慮していくことは難しい。しかし、冬季の活動場所確保に労力を要する札幌地区においては、屋内競技場、人工芝のサッカー場の増加など活動可能な施設を増やしていくことは不可欠である。継続的に青少年選手たちのハード面が充実していくよう自治体や行政に働きかけていく必要があると考えられる。

## 5. まとめ

本研究の調査により、デンマークでは、札幌地区と比較して、より幅広く青少年サッカーが普及・振興されていることが明確になった。加えて、2009年から2011年の約2年間でサッカーに取り組む6歳～12歳の青少年の割合が12%増加している。

デンマークにおける近年の急激な「青少年サッカー一選手の増加」は、サッカー協会が「12歳以下は、個々の能力差に左右されず全員平等に機会を与える」という育成年代における指導指針の提起を一つの大きな要因としている。しかしながら、このような指導指針を日本で取り入れれば、急激に青少年サッカー振興が拡大するかは一考を要する。千葉らは、「みな中流のデンマーク」と表現し、皆が手厚い福祉を享受するために現存する高い税率（消費税25%など）を約85%の国民が支持していると報告している。つまり、このような指導指針が受容されている背景には、デンマーク国民が潜在的に保持している「平等」「公平」を尊重する精神風土にとってもよく適合している点を配慮しなければならないからである。

一方で、札幌地区のみならず、日本の青少年サッカーにおいては、10歳前後からはエリート選抜等が実施され、個々のサッカー選手としての能力により、種々の選別が行われるのが一般的である。もちろん日本サッカー協会が掲げている「Japan's Way」というスローガンが示す通り、もはや海外の模倣に重きを置いた強化・発展を目指すのではなく、「普及・振興」においても他国の良い点で吸収できる部分は参考にしながら日本人に適合した進化を目指すべきであろう。

デンマークでの現地調査において、数多くのサッカー関係者からこの言葉を耳にした。

### Football should be a good activity (for children)

デンマークには、競技的側面より社会的、教育的側面を重視する大人たちの中で、サッカーを楽しむ多くの少年選手たちの姿があった。

「Japan's Way」における日本及び札幌地区の青少年サッカーの振興において、本研究で明らかになったデンマークの現状が、一つの参考になれば幸いである。

### 参考文献

- ・ Anders Madsen(2013)Official Powerpoint File for UEFA Study Group DBU
- ・ Anders Madsen(2013) Grassroots C&Y Football DBU
- ・ Carsten Dohm(2011) Age-Related Training DBU
- ・ 千葉忠夫 (2011) 格差と貧困のないデンマーク PHP 研究所
- ・ 人見秀司 (2010) サッカーをめぐる冒険 <http://keio-soccer.blog.sport.jp>
- ・ 北海道札幌地区サッカー協会 (2012) 2012年度札幌地区サッカー協会年報 巻末資料
- ・ 笠野英弘 (2010) サッカーの愛好者を競技の特性比較からみたサッカー市場の拡大に関する考察—スポーツ行動の予測モデルを用いて— スポーツ産業学研究 Vol.20,pp29-40
- ・ 樫塚正一 他 (2011) 外国人サッカー指導者の言説から見たコーチングに関する研究 武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学) 第59号 pp87-95
- ・ 鎌田安久 他 (1993) 岩手県における中学校サッカー指導者の実態 岩手大学教育学部研究年報 第52巻第3号 p69-83

- ・ ケンジ・ステファン・スズキ (2010) デンマークが超福祉大国になったこれだけの理由  
合同出版株式会社
- ・ 日本サッカー協会 (2007) 2005 年宣言の実現に向けて Technical news ,Vol.23,pp2-4
- ・ 日本サッカー協会 (2007) 育成年代のゲーム環境に関するガイドライン  
JFA オフィシャルホームページ
- ・ 田嶋幸三 (1989) 子供の競技種目別トレーニング -その現状と問題点- Japanese Journal of Sports Science Vol.8 No.7 p439-442  
日本バイオメカニクス学会
- ・ トーマス スロサニク (2007) デンマークサッカー協会の育成システム  
<http://www.ssksports.com/hummel/supply/interview09.htm>
- ・ 富江英俊 (2008) 中学校・高等学校の運動部活動における体罰  
埼玉学園大学紀要 (人間学部篇) 第 8 号 pp221-227
- ・ 山橋貴史 (2013) 北海道ユースダイレクター会議 検討資料
- ・ 銭本隆行 (2012) デンマーク流「幸せの国」のつくりかた 明石書房

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。